

歌の周辺

昭和60年3月、母が亡くなつた。享年七十四歳であつた。以前、この欄で「遍路路の路傍に生ふる大葉子の無名の生を生きませり母は」という歌について書いた時に記したことだが、母は八幡浜市の自転車屋の娘として生まれ、高等小学校を卒業後、市内の電話局に勤め、交換手として働いた。やがて結婚し、一男一女を育てながら事業主婦として生きたが、晩年は肝硬変を患い、闘病生活を送つた。母の遺体を火葬したあと、若かつた頃の母の活力ある骨盤を思い、連翹の黄色の花を詠み込むことでその活力を表現しようと試みた作である。

(高野公彦)



（写真・木畠紀子）

高野公彦うた紀行・48

我を生なしし母の骨盤世に在らず連翹咲
けりその黄の火花

—『雨月』

【鑑賞】母の死とその葬りを詠んだ「檣の葉」三十七首の一首。連翹の火花は荼毘のようにも読める。産を思わせる「骨盤」という言葉に自分の記憶以前の自己存在がある。それがもうこの世ではなく、同時に母の記憶の中の自分も世にはない。喪失感の只中で絶対的な死と厳しく対峙している。現実を受け入れる深い悲しみの象徴として、黄の連翹が痛みを伴つて咲いている挽歌。

（中村敬子）



ふるさとコレクション——219

賀露元唄貝殻節と貝殻屋敷跡（鳥取市賀露町）

鳥取市の千代川河口の賀露は古くから漁労を生業してきた。江戸時代中期より昭和の初めまで県下全域の海で10年、20年、50年の周期でイタヤ貝が大量発生しその年を「貝殻年」と呼んだ。

来る日も来る日も沖に舟を漕ぎ出し、大きな熊手を付けた漁網を投げ入れて海底を曳く「貝殻取り」は実に過酷な労働であった。

その労作歌「賀露元唄貝殻節」はかつては潮風で喉を鍛えた漁師が無伴奏または太鼓のみで歌った。それには櫓を漕ぐ力強さと大漁の喜びと賑わい、さらに肉体を酷使して生活を支えた漁師らの悲哀の一端が窺えて重厚さを醸している。

久松山から沖合見ればあれが賀露かや鳥ヶ島 何の因果で貝殻漕ぎなさる波のしぶきをよ朝から浴びてよ色は黒なる身は瘦せる～ 膨大な量の貝殻は河口に廃棄され続け、その上に砂を埋め立てて広大な新たな土地が作られた。そこに家々が軒を連ね一帯は「貝殻屋敷」と呼ばれたが、時代の推移と共に沈下する箇所もできた。貝殻屋敷には今も人が住み沈下箇所は道となつて散策が楽しめる。

（写真・解説：竹内みどり）